

氏名	山 嵯 一 也 <small>ヤマザキ カズキ</small>
所属	都市環境科学研究科 都市環境科学専攻 観光科学域
学位の種類	博士 (観光科学)
学位記番号	都市環境博 第 336 号
学位授与の日付	令和 4 年 3 月 25 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題名	カメラによって選手・競技会場・都市景観を映し出す五輪景観の構想・計画・実現の経緯に関する研究—ロンドン 2012 年大会を事例として—
論文審査委員	主査 准教授 岡村 祐 委員 教授 川原 晋 委員 教授 清水 哲夫 委員 教授 小泉 雅生

【論文の内容の要旨】

五輪は世界が注目するスポーツの祭典である当時に、開催都市や国の文化などを世界に発信する貴重な機会でもある。しかし、インフラ整備、大会後の施設維持などにかかる莫大な開催費用を理由に多くの都市が招致を断念する傾向が近年見られる。その肥大化する開催費用の一因にテレビ放映権料の高騰化がある。その上、五輪の主催組織である国際五輪委員会(IOC)は、映像の五輪という考えを推進すべく、五輪放送機構(OBS)を設立し、映像化を前面に押し出すだけでなく、オンライン上の独自チャンネルを開設した。五輪の映像の影響力は大きくなっている。2012年に開催したロンドン五輪はこのIOCの思惑を巧みに取り込んだ招致計画を打ち出していた。それは市内中心部に仮設競技会場を設置し、競技背景に都市景観を映し出したテレビ映像を世界中に発信する招致計画を立案し、実現した。

このような研究背景のもと、本研究の目的は以下の3つとなる。まず、招致計画から開催計画策定の経緯において、競技の背景に都市景観をテレビ中継で映し出すというコンセプトがどのように生み出されたのかを、過去の五輪との比較やIOCの理念などを踏まえて明らかにする(研究課題1:コンセプト立案と会場敷地選定)。次に、ロンドン五輪において五輪景観を生み出した3会場、4競技事例(グリニッジパーク馬術競技会場、ホースガーズパレード・ビーチバレーボール競技会場、ロンドン市街マラソン競技会場)の公式映像から五輪景観の特徴を明らかにする(研究課題2:カメラポジションとカメラワーク)。そして、これら五輪景観を生み出す競技会場の計画立案から実現までの経緯や開催都市空間における建築的特徴について明らかにする(研究課題3:建築設計)。調査方法としては、公式資料(映像、計画・設計図書)を収集、解読し、また関係者へのヒアリング調査の対象を、ロンドン五輪組織委員会(英国五輪協会、招致委員会も含む)、IOC(国際競技連盟やOBSも含む)、行政(ロンドン市や英国政府)、建築事務所の4者とする

。既往研究については建築計画、景観研究、都市計画、メディア研究を整理する。まず、ロンドン五輪における仮設競技会場の計画経緯と活用の必然性と有効性についての論考があるが、周辺都市景観との調和には触れられていない。次に、五輪競技と都市景観の関係について、競技(マラソン)の景観分析や、五輪招致による都市景観の変容に関する考察があるが、本研究が目指すのは映像を通しての景観体験である。また、五輪開催が都市計画に及ぼす影響では過去の大会を事例とした論考が多くみられるが、五輪とともに世界へ発信されるべき保全対象としての景観やランドマークに関する研究はみられない。そして、五輪の映像の公式記録映像やテレビ視聴に込められたメッセージや選手のストーリーの論考があるが、本研究はメディア論に固執するのではなく、設計論として展開するものとする。

ロンドン五輪招致計画において、どのように都市景観を映し出すという大会コンセプト立案を生み出し、そのコンセプトを具現化する競技会場計画とその敷地を選定したのか、その経緯を明らかにする。また、五輪景観を有する競技会場の成立条件を全競技会場に当てはめ、抽出した。以上からロンドン五輪招致委員会は都市を見せるという大会コンセプトを具現化するために競技会場の敷地を選定していたと言える。

本研究では、選手、競技会場、都市景観の各要素をテレビカメラによって重層的に映し出す映像を「五輪景観」と定義し、市内中心部の仮設競技会場において、カメラポジション、カメラワークと要素間の関係によっていかにして五輪景観が成り立つのかを明らかにした。公式記録映像で市内ランドマークや周辺都市景観が映りこんだ映像を抽出し、視点(カメラポジション)を競技会場図に示し、カメラワークなどの特徴を記した表を作成した。以上のことから競技特性から似たような映像(同じ場所や周回など)に対して異なるカメラワークで選手と都市景観を映し出していたと言える。

ロンドン五輪では競技映像によって周辺都市環境の価値を高める都市プロモーションの役割が期待されていたと言える。五輪景観を生み出す競技会場の計画から実現に至る経緯を整理し、事象と関係者の関与を時系列にまとめた。また、五輪景観を生み出す競技会場の建築設計に着目したことで、五輪景観のある競技会場はその敷地条件や、都市景観を縁取る観客席の配置と形状によって決められ、都市景観が発信可能となったのは都市保全の蓄積と見せるべき対象が明確であったからと言える。

本研究の結果として、周辺都市景観を映し出す五輪競技会場の計画・実現のために必要なことを時系列で整理する。まず、招致検討期間と招致活動期間では、英国五輪協会や招致委員会が主導して大会コンセプトとそれを具現化するための競技会場敷地選定が必要となる(研究課題1)。また、招致計画が具体的になる招致活動期間では、招致委員会や建築事務所によって競技会場の周辺都市景観への指向性を持った観客席による建築計画が立案される(研究課題3)。そして開催準備期間においては、競技会場の背景である周辺都市景観の構想を具現化するためにOBSと設計事務所が調整し、カメラポジションとカメラワークを決定する(研究課題2)。

ロンドン五輪における「都市空間を舞台にし、その魅力を世界に発信する」という五輪開催の明確なコンセプトは、各関係者にとって大会招致や競技会場計画・設計の拠り所となった。そのコンセプトを具現化したのが仮設競技会場であり、そのメリットは従来の経済的側面や環境的側面のほか、施設立地・建設の潜在的な候補地の拡充にあり、五輪景観の創出可能性を高めることにも繋がった。その上、新採用競技の普及促進という点においても、五輪景観を構成する開催都市を代表するような競技会場敷地のカメラ

による視点やランドマークとなる視対象の存在は、五輪期間中の放送、そして五輪後にアーカイブ化される映像を通じての景観体験と共に競技への注目度を高めることに貢献することが期待される。